教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　塩　谷　勇　直
編　集　広　報　部

もくじ

◎巻頭言 …… 1
◎関ブロ栃木大会に向けて …… 2
◎第55回県教頭会研究大会 …… 3
研究大会分科会報告 …… 4～17
◎特色ある学校 …… 18
◎地区だより …… 19
◎ひろば・編集後記 …… 20

巻頭言

首を横に！

栃木県連合教育会　会長　山　市　　隆

「まあーいいか」、こんなことの繰り返しで今まで生きてきました。５割の人生といいますか、50点を取れればいいかという人生です。もう少し頑張って60点をと、努力した時期もありました。高校、大学時代の６割の人生です。単位を落とさない、赤点を取らない努力でした。しかし、世の中には10回のうち７回失敗しても「すごい」と言われる世界があります。３割の人生です。野球の世界の３割バッターです。私にもそれに優るとも劣らない３割のすごい時代？がありました。校長らしきものを務めていた時代です。様々な出来事に直面し、その処し方に対して少しは自信を持って判断できたものは甘く見積もって３割でした。しかし、この３割はとても厳しい３割で、残り７割は多少の失敗を許されることもままありましたが、その多くは失敗が許されませんでした。子どもや学校にかかわる判断だからです。

残り７割の判断の誤りを防いでくれたものは何か。それは「縦」ではなく「横」でした。私の出会った教頭先生は皆、容易に首を縦に振ることなく、「保護者はそうは受止めませんよ。」「先生方はこう考えているはずですよ。」などと、少しでも疑問に思ったことにはすかさず首を横に振ってくれました。「ちょっと待ってください。おかしくないですか。」という「首を横に」のアドバイスの中には、その教頭先生が歩んでこられた経験に裏打ちされた、私が持ち合わせていない見方・考え方がたくさん詰まっていました。私にとっては思いもよらない様々な情報を提供してくれたのでした。多くの症例を持つお医者さんが確かな診断を下せるように、情報が豊富であればあるほど確かな判断ができるのです。「首を横に」というアドバイスが、大きく誤ることのない残り７割の判断を導いてくれたのです。

「首を横に」の話を少し具体的に話してみます。「首を横に」からは、必ず話し合いが生まれるのです。その理由を説明する必要があるからです。話し合いの面白いところは、人それぞれが蓄えてきた経験が異なり、ものの見方・考え方に違いがあるため話題がどんどん広がっていくのです。その過程で思わぬアイデアが出てきたり、今までうやむやであったものが見えてきたりするのです。私はこの話し合いをしながら様々な情報を得て、残り７割の判断の誤りを回避することができたように思うのです。また、この話し合いはそれだけでなく、大変勉強になり仕事の財産になりました。

「首を横に」は、教頭先生の校長先生への最大のサポートであり、教職員の育成でもあります。首を横に振ったり振られたりが多くの話し合いの場を生み職員室の成長につながるのです。ぜひ「首を横に」！

関ブロ栃木大会に向けて

第59回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会に向けて

県教頭会副会長・関ブロ栃木大会実行副委員長　鈴　木　純　子

第59回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会の準備が、実行委員会によって計画的に進められている状況をお知らせいたします。まず始めに、平成27年度最後の役員会で、実行委員会メンバーと組織図（役割分担）の確認をし、平成28年度の準備委員会で推進計画の検討からスタートしました。その後、平成30年11月８日㈭に宇都宮市文化会館で全体会、９日㈮にホテル他会場で14分科会の実施を計画し、研究サブテーマを決定しました。また、第57回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会茨城大会の視察をしたり、県外参加者のＷＥＢによる参加者登録についてプロポーザル方式で旅行会社を決めたりしました。さらに、平成29年２月23日に関ブロ事務引継会を栃木県で行い、大会運営等の具体的な話を聞くことができ、委員の方々の意識が高まりました。

平成29年度の実行委員会において、記念講演会の講師に弁護士の清水幹裕氏を決め、演題を「今、教育に求められるもの～魅力ある指導者として～」にしました。次に、シンボルマークや印刷業者、看板業者を決めたり、全体会場・分科会場の視察をしたりしました。同時に、原稿執筆要項作成、参加要請数や大会の目指すもの決定、物産展の出店依頼を行いました。予算関係では、公務員弘済会へ補助金の申請をしたり、研究振興基金から大会参加費を支出（個人負担なし）したりすることを決めました。ＪＲ宇都宮駅から宇都宮市文化会館まで無料シャトルバスを提供することも決定しました。12月には、第一次案内を各都県及び県内会員に発送しました。

現在は各部推進計画に基づき活動を進めています。大会運営要項については、名前を入れて完成できるようにその他の部分を作成中です。来年度、実行委員が一部変わっても支障なく実施できるように進めています。分科会については、提言地区ごとに運営していただきます。ぜひ、地区全体で協力し合い、大会が意義あるものになることをお願いいたします。

関ブロ研究大会栃木大会に向けて

県教頭会研究部長・関ブロ栃木大会運営統括部長　髙　橋　　司

平成30年11月、いよいよ関東ブロック研究大会が本県で開催されます。日頃より継続性・協働性・関与性を大切にしながら取り組んできた研究の成果や、そこから見えてきた新たな課題について、他都県の副校長先生・教頭先生方と交流を深めながら議論し合う素晴らしい大会となることを期待しています。

教頭会は全国約２万８千人の教頭からなる、政策提言能力を備えた職能団体です。これを私が知ったのは、教頭２年目でした。各ブロックから集まった、全国公立学校教頭会の専門部員は26名で、研究部や総務部に分かれて活動をします。自分が務めさせていただいた全国研究部は、その年度の研究の手引きを作成したり、全国研究大会をサポートしたりします。研究大会の内容は全国も地区ブロックも県もほぼ同じです。規模の違いはありますが、全国統一研究主題・第１から第６の全国共通課題で研究したことをもとに、代表の教頭先生が提言者となり、課題ごとに参加型分科会が行われます。

ところで、平成30年度の栃木大会の舞台は、２年前から、関ブロ栃木大会推進委員、そして、栃木県公立小中学校教頭会事務局の皆様により着々と準備が進められており、来年度の開催に向けて現在も計画の細部が練られています。今後はさらに組織が細分化され、運営面等での役割分担が必要となってきます。私たち栃木の教頭の結束力を高め、団結し、大会を成功へと導きたいものです。

さて、昨年の９月21日、11月の県研究大会の提言原稿の校正が行われました。どの班の研究も協働性が発揮され、県の研究サブテーマを受けた素晴らしい内容でした。関ブロ栃木大会の提言発表は、この原稿がベースとなります。関ブロ大会の原稿の提出が来年度の６月であるためです。したがって、分科会で議論されたことや指導・助言をいただいたことを生かし、さらに研究を発展・前進させることが求められます。他都県の教頭先生方との交流・議論が深まるよう、ご協力をお願いします。

第 55 回 県 教 頭 会 研 究 大 会

心に響くコミュニケーション　ペップトーク
～やる気を引き出す魔法の言葉～

講師　日本ペップトーク普及協会　会長　**岩　﨑　由　純 氏**

本年度の講演会では、日本ペップトーク普及協会長の岩﨑由純氏を講師に迎え、「心に響くコミュニケーション　ペップトーク　～やる気を引き出す魔法の言葉～」をテーマに元気・活気・勇気を与えるトーク術について講演をしていただきました。

ペップトークとはスポーツの世界で選手や生徒、部下などを励ますのに監督やコーチなど指導者が、試合前などに使う「激励のショートスピーチ」のことで、ペップ（Ｐｅｐ）は元気、活気、活力という意味だそうです。

講演の内容は、氏がオリンピックの強化コーチとして参加した時の映像や様々な場面でのペップトークによって、選手にやる気や活気を与えていく映像とともに、そのために必要なキーワードについて説明をしていただきました。

キーワードには「ポジティブストローク」として相手にプラスの印象を与える話し方や態度、「３種の承認」として、存在承認・行動承認・結果承認、相手の成功を信じて指導することによる「ピグマリオン効果」、「さぼるな」などのネガティブな言葉を「しっかりやろう」などのポジティ語に変換する利点など、特に、「ミスするな」や「忘れ物をするな」と言われると、逆にミスしたり忘れ物をしてしまう日本語の特徴を応用した肯定的な「イメージ」づくりの重要性など、ペップトークを成功させるための多くのキーワードについて話されました。

最後に幼稚園児が友達の「できる、できる、できる」の声掛けで、全く跳べなかった10段の跳び箱を跳び超える感動の映像で締めくくられ、最後まで会場全体が元気と活気に溢れた感動の講演会になりました。

（文責：宇都宮市立宮の原中学校　星　　和人）

研究大会に参加して（案内・接待係）

栃木市立国府南小学校　**塩　田　裕　子**

研究大会当日は、集合時刻の８時半前から自主的に各係ごとの作業が始まっていました。案内・接待係は各控え室の表示貼り、来賓・助言者名や人数の確認、講師用要項や胸花・接待用湯茶セットやおしぼりの準備等、責任者の先生を中心に分担して作業を進めました。

今年初めて係に携わらせていただき、当日までの複数回に上る会議や打合せを含めた用意周到な準備の様子、当日の係ごとの細やかな動きや巧みな連携プレー、臨機応変で迅速な対応を間近で体感し、教頭会の大きなエネルギーを実感するとともに、たくさんのことを学ばせていただきました。今回の経験を生かし、係を通して広がったネットワークを大切に、業務に励んでいきたいと思います。

分科会に参加して

宇都宮市立上河内東小学校　**清　水　久美子**

第１Ａ・１Ｂ分科会「教育課程に関する課題」では、二事例とも新学習指導要領の改訂の基本方針「社会に開かれた教育課程」の趣旨に沿った初年度の研究でした。第１Ａ分科会はコミュニティ・スクール実施に向けた取組、第１Ｂ分科会はコミュニティ・スクール及び小中一貫教育実施上の成果と課題についての発表でした。どちらの研究発表からも、学校内外の関係者の意見調整や、地域連携についての校内研修の実施など、教頭として全体の進行状況等を俯瞰して人的・物的支援をすることの重要性を認識しました。

また、提案後の班別協議では、学校を核として地域連携を推進するために、キーマンとなる教頭の役割について活発に意見交換され、有意義な協議になりました。

研究大会分科会報告　豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育

第１Ａ・Ｂ分科会　教育課程に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　根岸美登里　先生

地域とともにある学校づくり
－現状把握と教頭の関わり方の課題－

提言地区　宇都宮・上三川地区　小学校副校長会

豊かな人間性と創造性を育む教育課程の在り方
－地域とともにある学校づくりをとおして－

提言地区　下都賀地区　Ｂブロック教頭会

１　提言趣旨

⑴　宇都宮・上三川地区
小学校副校長会

ア　主題設定の趣旨

コミュニティ・スクール（学校運営協議会）の取組は今後学校が地域と一体となって子どもたちを育むために有効なツールである。そこで、各校の具体的な取組を基に地域とともにある学校づくりに必要な手立てや教頭の関わり方、果たすべき役割について明らかにしていきたいと考え本主題を設定した。

イ　研究の概要

上三川町では「地域とともにある学校」研究事業として推進している。その取組の中で、学校運営協議会の設置や運営方法、他機関・組織との連携の進め方、及び各校の特色ある学校運営協議会の在り方やこれらと教頭との関りについて研究した。

ウ　成果と今後の課題

- 学校運営協議会委員の研修や協議を重ねることで主体的な話合いがなされるようになった。
- 地域の方の教育活動への参加は、学校と地域の連携が深まるとともに教育効果も期待できる。
- ボランティア活動時の留意点を記したパンフレット配付が共通理解を図る上で効果的だった。
- 地域の方々の打ち合わせ場所の設置や行政主導の予算措置が必要である。
- 学習支援ボランティアでは様々な対象者に向けた周知と意識の高揚を図ることが大切である。
- ボランティア活動後の振り返りの在り方について検討が必要である。

⑵　下都賀地区
Ｂブロック教頭会

ア　主題設定の趣旨

本ブロックでは、地域に根ざした教育を推進する「とちぎ未来アシストネット」に取り組んでいる。また、平成29年度からは、ブロック内全ての小中学校において、コミュニティ・スクール及び小中一貫教育を本格的にスタートさせたところである。

そこで、サブテーマを－地域とともにある学校づくりをとおして－と設定し、教頭としての様々な関わり等を検討することで、より有効な活動にしていきたいと考え本主題を設定した。

イ　研究の概要

「とちぎ未来アシストネット」、コミュニティ・スクール、小中一貫教育等の実践から現状の把握と成果や課題を確認し、有効な活動にしていくための教頭の働きかけについて研究した。

ウ　成果と今後の課題

- とちぎ未来アシストネットによる学校支援ボランティアの活用で授業の質の向上が見られる。
- 学校運営協議会の開催により地域住民の学校や中学生への理解を高めることができた。
- 小中一貫教育の推進（小中交流）は、中学生の責任感を高める一助となっている。
- 学校運営協議会委員の参画意識をより高められるよう働きかけていく必要がある。
- 小中学校で連携した学校評価が必要である。

2　グループ協議内容

⑴　〔あ〕班

○体制について

・地区によりコミュニティ・スクール、学校運営協議会、学校評議委員会等様々な組織をつくり地域連携を推進している。

○教頭の関わりについて

・上述の体制づくりや組織運営の中心的な役割を担う。学校経営方針への理解や、同一歩調で子どもたちと向き合うことの大切さ等の組織の基礎となる環境づくりに取り組んでいる。

・地域連携教員が教頭でない場合は、両者が地域連携の両輪となり推進している。教頭の役割は地域の方々との窓口担当が多い。

⑵　〔お〕班

○予算について

・概ね予算化されているが、そうでない地区もある。また、予算化されていたとしても各学校に配当されているケースや小中一貫の学校区単位での配当など、地区により実に様々である。

○学習支援ボランティアについて

・読み聞かせ、珠算、合唱、昔あそび、米作り、プール清掃等積極的に活用している。

・市や町で作成された名簿の登録者や、各学校で募集・登録されている人材を活用している。窓口は地域連携教員や教頭が対応している場合が多く、取組の継続性を考えるとコーディネーターとの関わりが重要である。

○小・中の連携について

・中学校区内の小中教職員で学習・保体・教務等の部会を組織し、連携を図っている地区がある。

・児童生徒の交流では、あいさつ運動、文化祭、体育祭、読み聞かせ、清掃活動等どの地区も積極的に取り組んでいる。

⑶　〔け〕班

○協議の柱（１Ａ）について

・コミュニティ・スクールの立ち上げについて教頭として関わることが多い。

・地域連携教員や地域コーディネーターをサポートし、ボランティアとの橋渡し役を担う。

・ボランティアを活用するにあたり教職員の受け入れ体制の整備に努める。

○協議の柱（１Ｂ）について

・教育課程編成に関して教務主任と連携を図る。

・公民館や行政機関と協力・連携し、ボランティアとの交流や予算要望に努める。

3　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

学校運営協議会を設置していく上で、先生方の共通理解を図り、同じベクトルで進むことが大切であり、そのための教頭の役割は大きい。

また、関係者が当事者意識をもって、熟議を重ねること、協働すること、マネジメントをすることが大切である。その際、十分に時間をかけることや教頭が全体を俯瞰して調整して進めていく必要がある。

⑵　提言Ⅱについて

３つの取組についての提言であった。地域の声が集まりやすくなる工夫が必要であり、その際教頭として、人間関係を大切にし、建設的な意見を積み上げていけるようにしていくことが大切である。

⑶　まとめ

２つとも「地域とともにある学校」の提言であり、社会に開かれた教育課程の推進をはじめ、これらの取組は、窓口となる教頭の役割が大きい。地域連携教員を兼務している教頭も多く、地域連携教員については、栃木県が全国に先駆けており、他県はモデルとして見ている。

平成27年12月の中教審答申では、学校と地域の連携について、次の五つの視点を挙げている。

・これからの時代を生き抜く力の育成
・地域から信頼される学校
・地域住民の主体的な意識への転換
・地域における社会的な教育基盤の構築
・子どもたちをともに育てる

これを受け、法改正により平成29年４月から制度上すべての学校に学校運営協議会を設置することが可能となった。すべての学校で準備をしてほしい。

なお、答申のおわりに、誰かが何とかしてくれるのではなく、自分たちが当事者として自分たちの力で学校や地域を作り上げていく、子どもたちのために学校をよくしたい、元気な地域を作りたい、そのような志が集まる学校、そこから学校や地域が作られ、子どもたちが自己実現や地域貢献など志を果たしていける未来こそ、これからの未来の姿である、とある。

（記録：毛塚　修一・稲澤　正明）

第１　分科会　教育目標・教育理念に関する課題（合同）
第３(3)分科会　ＰＴＡ及び地域社会に関する課題（合同）

助 言 者　下野市立緑小学校長　　広木　俊夫　先生

社会に開かれた教育課程
－学校と家庭・地域が教育目標を共有・実現するための教頭の関わり－

提言地区　那須地区　大田原Ａ教頭会

地域や家庭の変化に対応したＰＴＡ・地域連携活動の実践
－学校・家庭・地域間のつながりを深める実践をとおして－

提言地区　南那須地区　小中学校教頭会

１　提言趣旨

(1)　那須地区
大田原Ａ教頭会

ア　主題設定の趣旨

新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現するためには、学校の教育目標や目指す子ども像を家庭・地域と共有し、連携して教育活動に取り組んでいく必要がある。そこで、私たちは教育目標等を家庭や地域と共有する方法や目標を実現する方策などについて研究したいと考え、この主題を設定した。

イ　研究の概要

本年度は、アンケート調査を実施し、本地区の取組状況を把握した。また、教頭としての関わりや問題点について記述式で調査した。

(ｱ)　調査内容

①　学校の教育目標等を家庭や地域と共有する方法と教頭の関わり

②　地域の人的・物的資源の活用の状況や放課後や土曜日を活用した教育活動の在り方と教頭の関わり

ウ　成果と今後の課題

・教育目標や教育方針等を家庭や地域と共有するために、様々な方法を用い、機会を捉え伝える工夫をしている。その際、教頭は、補佐機能と調整機能を発揮し、学校の組織が機能するように関わっている。

・現在の学校の取組が有効かＰＤＣＡサイクルで計画的に改善していくことが望まれる。その際、業務のスリム化や校内研修の企画・運営による教職員の意識改革が必要である。

(2)　南那須地区
小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

現在、学校を取り巻く環境は難しい課題を数多く抱えている。

そこで、学校教育の基盤である地域や家庭そのものも大きく変化する中で、その変化に柔軟に対応しながら、保護者や地域と連携した活動をどう工夫・改善し、家庭や地域の教育力をどのように高めていくのかを研究したいと考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

本地区のそれぞれの学校で、ＰＴＡの組織や運営、地域との連携について洗い出された課題と、改善するための実践、教頭の関与のようすや成果についてまとめた。

・課題１　交流を深める主体的なＰＴＡ行事
「親子学習」「親学習プログラム」

・課題２　ＰＴＡ組織の改正による活性化
「専門部を地区選出から学年選出へ」

・課題３　地域の組織との連携
「青少年育成会を活用した防犯対策」

ウ　成果と今後の課題

・保護者や地域の学校に対する願い、要望、実態等を前向きに受け止め、地域や関係機関を活用した参加型の学校行事を工夫することで、保護者の意識が変化し、学校活動の活性化が図れた。

・ＰＴＡ・地域連携活動のさらなる活性化に向けて、学校と保護者、地域間で協議検討する時間をどう確保し、地域人材をどのように活用していくかを検討したい。

2　グループ協議内容

(1)　提言Ⅰについて

- 保護者や地域と共有・連携しながら教育目標や教育課程を作成していくために、学校運営協議会にはアドバイスではなく共に考えていくことを要望する。
- 学校運営協議会メンバーの人選は慎重に行う必要がある。
- 教頭が学校たよりを地域に直接配布しに行くことで、地域とつながり、地域とのパイプ役となる。
- 地域連携教員だけでなく教職員全員が地域とつながろうとする意識をもてるよう教頭が働き掛けていく。
- 来校者が来た場合の対応は教頭が要であるが担任にも積極的に関わってもらえるよう、教頭は、後ろから支えるイメージをもちたい。
- 保護者や地域と共有・連携していくための打合せ等の時間の確保が難しい。
- 学校教育目標を地域と共有するための方法として学校たよりやグランドデザインの配布は有効である。
- 学校の情報を地域や保護者に発信するにはホームページが有効である。
- 地域と学校がギブアンドテイクの関係になる必要性を感じる。

(2)　提言Ⅱについて

- ＰＴＡが主体的に活動するには、任期を複数年にして実態を理解してもらうのもよい。また、地域のニーズを把握し、学校が地域に貢献できる活動を取り入れたり、管理職が地域に入ったりしていく必要がある。
- 様々な価値観をまとめる役割を担う人材が少なくなってきている。教頭は地域との活動の窓口となり、連絡調整を進める必要がある。
- ＰＴＡや地域とのつながりには教頭が必要だが意識して担任等、他の先生方に関わらせて、調整役をやるようなスタンスがよいのではないだろうか。
- 地域の変化に伴う組織の見直しなど早めの対応が必要である。
- ＰＴＡの意識を高め、学校をサポートする立場としてよい関係づくりに努めることが大切である。

3　指導助言

(1)　提言Ⅰについて

- 学校たよりを地区に配布し、学校の情報を伝えていくことは、教育目標を共有するのに有効である。
- ホームページでの情報発信は保護者の反応が良い。また、ホームページは新しい情報を随時更新できる点に優れている。
- 学校と地域が連携していくためには、まず、管理職が地域をよく知る必要がある。校務で多忙ではあるが、教頭が率先して地域の行事に参加したり、通学路を歩いて保護者や地域の方々と話したりすることが有効である。
- 学校に地域の方々を招くだけでなく、地域行事に子どもたちを参加させる等、学校から地域へ出て行くことを積極的に進めていきたい。

(2)　提言Ⅱについて

- 保護者は、教員より学校のことを知っている存在である。保護者のＯＢを積極的に活用すべきである。
- 学校だよりやホームページなどで、学校の情報を地域に発信していくとともに、教員も地域に出て地域を知る必要がある。
- 地域のサークルなど地域にあるものを活用したり、地域の人を呼んで話を聞く機会を設けたりするのもよいだろう。また地域の大会に参加するなど、情報発信だけでなく参加型を考えるとよい。教員はＰＴＡのＴとして地域に参加したいものである。
- ＰＴＡの委員のなり手がなければ、スリム化も検討する必要があるだろう。
- 親子活動としてＰＴＡ行事を設定すると、参加は増える。
- ＰＴＡ組織としてより、保護者として巻き込んでいくことが大切である。

（記録：豊田　浩美・長谷川友美）

第２Ａ・Ｂ分科会　子どもの発達に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　宇都宮市立旭中学校長　　髙橋　利和　先生

子どもの瞳が輝き、笑顔があふれる学校づくりを目指して
－学ぶ力や豊かな心を育むために－

提言地区　下都賀地区　Ａブロック小学校教頭会

小中の連携による９年間を見通した健やかな子どもの育成
－小中が連携した取組の推進と教頭の役割－

提言地区　佐野地区　小中学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　下都賀地区
Ａブロック小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

小山市では、「学びや育ちを『つなぐ』、指導を『そろえる』、みんなが『つどう』」をテーマに小中一貫教育を全面展開している。

本教頭会では、子どもたちの発達課題をとらえて、学びや育ちの連続性を保証した教育にどのように取り組み、教頭としてどうかかわっていくか研究を進めたいと考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

⑴　確かな学力向上のために
- 授業力向上を組織的に行っていくための教頭の役割

⑵　豊かな心づくりのために
- 学校と家庭や地域、関係機関等が連携して教育するための教頭としての関わり

⑶　体力向上のために
- 学校教育の中で児童の体力向上を図るための教頭の関わり

ウ　成果と今後の課題

- マイスター事業等の実施や義務教育学校の開校により、小中間の指導者交流がより活発になり、教職員の授業力向上への意識が高まった。
- 豊かな心を育むために、教頭として子どもたちを取り巻く環境を整える手立てや関わり方について研究を進めることができた。
- 今年度検討した研究の方向性をもとに、教頭としての具体的な関わりをどう実践し、工夫改善していくかが課題である。

⑵　佐野地区
小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

「生きる力」を育成し、より質の高い学校教育の実現のために、本教頭会では、小中一貫教育の在り方について研究を進めてきた。本年度は小中一貫教育グランドデザインの設定及びその見直し等、課題を明らかにし、その改善を図ることにより、小中一貫教育の取組が充実すると考え、本研究主題を設定した。

イ　研究の概要

㈠　指導のつながり「グランドデザインの作成」
目指す子ども像の共有と系統的指導

㈡　情報のつながり「小中連携支援シート」
子どもの特徴を理解した上での一貫した指導

㈢　小学校から中学校への学習内容のつながり
小中の学習内容を把握した指導

㈣　家庭とのつながり
ノーテレビ、ノーゲームデーの実施

ウ　成果と今後の課題

㈠　成果について

グランドデザインの作成については、学校間で目指す子ども像を共有し、系統化を図って整理していくことの必要性を確認した。また、小中連携支援シートを活用し、一貫した指導を継続することが、子どもの成長につながることを共通理解できた。

㈡　今後の課題について

小中学習内容関連票については、その作成に向けて、関係諸機関へ働きかけていかなければならない。小中授業研究の実践も必要である。

２　グループ協議内容

⑴　協議の柱について

「学びや育ちの連続性を保証した教育（確かな学力の向上、豊かな心づくり、体力の向上）のために教頭はどうかかわるべきか。」

・教師の授業力向上に力を入れていくことが大切である。そのために、授業づくりに積極的に関わっていくこと、教材研究へのアドバイスをしていくことが教頭としての役割である。
・マイスター制度、レジェンド講座が効果的でよい研修になるよう、教頭が流れをつくりコーディネイトすることが必要である。
・同僚性を生かしたミニ研修会を教頭を中心に進められることは効果的である。
・中学校区での「そろえる」ことについて、学区の区分けが複雑なところでは難しいこともあるのではないか。隣接する中学校区での話合いも行うなど、教頭として考慮すべきことである。
・校内組織と外部組織とが同じ方向を向いて教育に取り組んでいくためには、教頭がキーマンであることを自覚し、チームとしての学校となるよう連携を図っていきたい。

⑵　協議の柱について

「小中が連携して、子どもの発達課題に対応した体制を構築していくために、教頭はどのようなコーディネイトを果たしたらよいか。」

・小中連携支援シートは保護者のニーズに応えており、活用次第では効果的である。教頭としては、これをどのように活用するか、助言や示唆をすることが大切である。
・グランドデザインは、校長が話し合い、原案を作成する必要がある。その際、育てたい資質能力は統一するが、その育て方については、小中の創意工夫を生かしたい。
・小中授業研究については、教頭がリーダーシップを取って、事前の話合いや準備等のコーディネイト行う。
・小中一貫教育を進めるための教頭の役割としては、教員交流の計画や手配、学校間の連絡調整、校長のビジョンへの意見具申、教務主任や学習指導主任等推進役への助言等が挙げられる。
・今後の教頭の仕事としては、小中一貫教育の現状を分析整理し、校長の指導の下、進むべき方向性を明示していくことと、小中一貫教育の成果を見取るための具体的成果指標の設定が挙げられる。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・若手の指導力向上について具体的な例が示されている。ＯＪＴとして職員室経営の中で取り組んでいってほしい。
・児童生徒指導における外部関係機関との連携やコミュニティ・スクールの組織づくり、地域ボランティアとの交流の場の設定など、役割を明確にし、しっかりアドバイスをしていくこと。
・安全管理、環境整備（環境美化を含む）に計画的に取り組むことが必要である。
・マイスター制度やレジェンド講座、義務教育学校の開校などにより、現在学校教育に望まれていることについての成果があがっている。今後の取組についてもさらなる成果が期待できる。

・「つなぐ」に視点をあてて取組を整理し研究していくとよいのではないか。

⑵　提言Ⅱについて

・グランドデザインについては、教育ビジョン、教育計画等、９年間のつながりが重要であり、発達段階に応じてどのようなことを実践していくのかを明確にしていく必要がある。
・学習内容関連票については、教科指導でどのようにつながるかが大切であり、これが学校教育の「幹」になる。「幹」ができずに「枝葉」ができてしまった感もあり、見直しが必要だ。
・教育というものにも、魂が入らなければならない。したがって、小中一貫教育の必要性について、全職員が理解することが重要だ。
・新学習指導要領でも述べられているが、これからは、社会に開かれた教育課程の時代である。発表の中にも、目指す児童生徒像をしっかり徹底させていくという内容があったが、９年後の子どもたちの姿を想像しながら、各中学校区の実態を踏まえて、目指す児童生徒像をつくっていくことが大切だ。その際、目指す子どもの姿を、家庭、地域、子どもと共有し、９年間で付けていきたい力を系統的に示すことが重要だ。

（記録：膝附　政江・齋藤　恭子）

第３⑴分科会　施設・設備及び事務に関する課題（合同）
第３⑵分科会　教育行財政に関する課題（合同）

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　伊藤　雅幸　先生

ＩＣＴ機器の有効活用における教頭の役割
－楽しい授業実践・ゆとりある校務運営をめざして－

提言地区　上都賀地区　小学校教頭会

安心・安全な学校づくりを目指して
－自らの命を守る安全教育のための体制づくり－

提言地区　那須地区　那須塩原市黒磯教頭会

１　提言趣旨

⑴　上都賀地区
小学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

加速度的に情報化、グローバル化が進み、将来の予測が困難なこの時代に、子どもたちに必要な「資質・能力」を育成していくには、ＩＣＴ環境整備は必要不可欠である。そこで、ＩＣＴ教育を支援し、校務情報化を含むＩＣＴ環境の整備を組織的・継続的に推進するために、教頭がどのように取り組んでいけばよいかについて研究を進めていくことにした。

イ　研究の概要

⑴　現状の把握

ＩＣＴ機器の整備状況は十分ではないが、そのような中でも、現在ある機器で効果的に対応しようと取り組んでいる。また、機器の整備だけでなく、人的支援や教員の指導力向上も課題である。

⑵　ＩＣＴの活用を支える教頭の役割

環境整備に加えて、活用の推進体制や教員の指導力向上などの整備も進めていかなければならない。教頭の関与の観点から取組事例を調査した。

ウ　成果と今後の課題

上都賀地区の学校において、ＩＣＴ整備が遅れている状況の中でも、活用推進のための各校の取組の工夫を知り、情報提供することができた。

今後、教頭として、教師がどのような子どもたちを育て、どのようにＩＣＴを活用していくのかがイメージできるように支援を進めたい。

また、校務運営への活用についても、研究を進め、業務負担軽減と効率化を図りたい。さらに情報セキュリティを高める取組も必要である。

⑵　那須地区
那須塩原市黒磯教頭会

ア　主題設定の趣旨

児童生徒の安心・安全を確保し、健全な成長を目指すためには、日頃から様々な事態に備えたシステムを構築するなど、学校安全体制を整えることが重要である。そこで、教頭として安全体制推進のためにどのような働きかけができるのかを調査・研究し、実践を通して明らかにしたいと考え本主題を設定した。

イ　研究の概要

安全体制づくりのための取組や行財政との関わり等の現状を把握するために、地区内の全小・中学校にアンケート調査を行った。実施している避難訓練の回数や内容、避難訓練実施時に工夫していること、安全体制づくりのための行政との関わり、教頭としての役割等について調査した。そこで得られた結果をまとめ考察を行った。

ウ　成果と今後の課題

- 各学校の安全教育の取組内容や現状を把握することができた。
- 教頭は校内での教職員の組織作りを常に意識しながら安全教育に取り組んでいることが確認できた。
- 校外においても、地域や外部諸機関と連携を図った組織づくりの重要性を感じていることが確認できた。
- 組織的・有機的に安全教育を実施するために、さらに、教頭がリーダーシップを発揮し、行政をはじめ各関係諸機関に働きかけ、安心・安全のための組織づくりに努めなければならない。

２　グループ協議内容

(1)　提言Ⅰについて

- ＩＣＴ機器の充実には市町によって差が大きい。行政に対して要望を行うのは教頭の役割。様々なデータを収集し、行政に提出し要望を行うようにする。
- 機器を有効活用できるかどうかは教員によっての差が大きい。研修を実施し、教師自身の質を高める必要がある。
- 校内でも教員による使用頻度の差が大きい。得意な教員がスキルを広めていくシステム作りに教頭が関わるといい。
- タブレットの利用によって、興味を持たせる教材が提供でき、子どもたちの変容が大きい。
- ＩＣＴを使うことが目的にならないよう、十分な教材研究の上で使用することが大切。
- 書く指導が抜けてしまうことがある。どの場面で書かせるかをよく考えて使うことが大切。
- 校務システムの導入により学校でしかできない仕事が増えた。そのため土日に出勤することが多くなった。働き方改革の視点からも改善策を考えていかないといけない。
- 校務システムの導入により、ゆとりある校務運営ができている。しかし、突発的トラブルが発生することも想定されるので危機管理が必要。
- 校務支援システムは便利な部分とそうでない部分がある。有用性を見極めて取り入れたい。
- 校務支援システムにより職員会議資料がデジタル化し、ペーパーレス化が図れた。
- 校務支援システムはセキュリティ対策がしっかりしているので情報漏洩の不安が減少した。

(2)　提言Ⅱについて

- 児童生徒の安全づくりのためには、行政、消防、警察、スクールガード等の様々な外部機関と連携を行っている。連携の橋渡しをするのが教頭の役割。
- 交通事故防止のために道路の整備を行政に要望するのも教頭の役割。
- 地域懇談会で不審者情報を共有したり、安全マップを作成したりしている。
- Ｊアラート発令時の行動については、学校から地域の自治会やボランティアに向けて対応マニュアルを学校から配布した。いろいろな場合を想定し複数の行動パターンを学校はつくっておく必要がある。

３　指導助言

(1)　提言Ⅰについて

- ＩＣＴ環境整備にあたっては、行政に対し機器等の要望をしていくことになると思うが、アプローチの仕方を考えるのは教頭の役割になるだろう。その際、必要性から考えた優先順位だけでなく、予算等から考えた導入可能性の順位を考えて要望することも一つの手である。
- 教員の技術・技能不足や研修不足、情報不足などの問題についてはスキルに長けた若手教員に活躍の場を与えてみるのも手である。
- 児童生徒がＩＣＴ機器を活用する際には、教師の指導も忘れずに入れてほしい。子ども、教員共に、情報モラル等の向上も忘れずに行ってほしい。

- 発表された事例を参考にして、様々な教育機会に活用してほしい。

(2)　提言Ⅱについて

- 学校安全のために、教頭として、安全教育・安全管理を組織的に行ってほしい。そのためには、消防法に基づく警備及び防災計画や学校保健安全法に基づく危機管理マニュアルなどを作成し、教職員の共通理解の下で取組を進めていくことが重要である。
- 避難訓練を実施する際、児童生徒の避難を指導するという視点の他に、児童生徒の安全を守るための教職員の取組を振り返り、点検するという視点もある。そう考えると、短時間でできる避難訓練もあるのではないか。
- 管理面をつかさどる教頭としては、施設設備の管理も大切な役目になる。特に、災害発生時には学校が避難所になることもあり、時には、行政職員だけでは手が足りず、学校職員が避難所の設営にあたることもある。そのためにも、避難所運営マニュアル等の作成や備蓄品の管理などについて、市町と確認していってほしい。
- 交通安全については、通学路の点検、学校・道路管理者・地域による通学路の安全確保に努めてほしい。

（記録：堀江　　賢・相澤　圭子）

第４Ａ・Ｂ分科会　組織・運営に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　宇都宮市立上河内東小学校長　　髙橋　英史　先生

組織・運営の活性化に係る教頭の役割
－教職員の指導力・協働性・意欲の向上を目指して－

提言地区　足利地区　小中学校教頭会

1　提言趣旨

⑴　足利地区
　　小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

勤務時間の長さやストレスなどの問題が山積している中、教職員が生き生きと活動していくためには、学校が組織的に対応していくことが重要である。足利地区では組織・運営を活性化させるため、○教職員の指導力の向上○協働性の向上○意欲の向上の３視点をあげて取り組むこととした。

イ　研究の概要

組織・運営を活性化させるため、３つの視点から学校の取り組むべき課題を明らかにした上で、継続して研究してきた「教頭としての４関与」ア　知的関与（方向性の指導）、イ　情的関与（共感的な理解・受容的な態度）、ウ　働的関与（共に働く）、エ　物的関与（条件整備）を意識しながら、教職員に対してどのような場面でどのような関わり方をすべきかについて研究を進めた。

ウ　成果と今後の課題

教頭が相談役、アドバイザーとして教職員に関わることで、若手もベテランの職員も、それぞれの役割を自覚して、高め合う関係が生まれてきている。また、財源確保と必要な備品や消耗品を整備することによって、仕事が効率化されるとともに、教職員の意欲の向上にもつながっている。

しかし、教職員に授業の空き時間や放課後に関わろうとすると、多忙感を増幅させてしまうことにもなりかねない。日々の校務をこなすことで精一杯の教職員も多いので、今後は働きかけのあり方について検討していきたい。

⑵　上都賀地区
　　中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校や子どもたちを取り巻く環境が複雑化・多様化している中、力強く未来を生き抜く子どもたちを育成するためには、個々の教職員の活動を有機的に結びつけ、教育課題に機動的に対応できる体制を整える必要がある。そのために、副校長や教頭としてどのような働きかけができるかを、切り口を変えて考えてみたいと思い、本主題を設定した。

イ　研究の概要

本地区には、特色ある異校種連携を行っている学校がある。各中学校区で行われている推進会議や研修会、学校行事、児童生徒や教職員、保護者（ＰＴＡ活動）等の交流や連携の事例から、有機的な運営や体制づくりの工夫について研究を進めた。また、連携推進のための教頭の関わり方について考察した。

ウ　成果と今後の課題

- 児童生徒の交流や学校行事への参加をとおして、お互いを理解することにより、思いやりの心を育成することができた。
- 教職員やＰＴＡの合同会議や活動をとおして、意思疎通や教頭の連携につながった。また、長期間、子どもたちの成長を見守ることができた。
- 小規模校では、単独よりも指導者が増え、活動の充実や多忙感の解消に役立った。
- 今後は、組織のスリム化を図り、負担軽減や円滑な運営を目指したい。また、交流や連携の目的やねらいについて、随時、教職員の共通理解を図るように努めたい。

学校組織の有機的な運営をめざす体制づくり
－異校種連携を生かして－

提言地区　上都賀地区　中学校教頭会

２　グループ協議内容

⑴　グループ〔あ〕

○提言Ⅰについて

・若手教員の育成のために、若手主体の研修や校務分掌でベテランと組み合わせる取組を行う。
・意欲の低下をどう改善していくかが課題である。教頭として、業務の細分化を提案する。
・部活動や学校行事の精選と学校支援ボランティアの有効活用を行う。

○提言Ⅱについて

・地域学校園では、小中無理のない程度で、相互授業参観や乗り入れ授業等の実践をしている。
・児童生徒の交流は、条件が整わないと難しい。
・渉外や職員関係の醸成、校長の方針の具現化などが、教頭としての役割である。

⑵　グループ〔い〕

○提言Ⅰについて

・長年継続されている４関与の柱が参考になった。教員の年齢構成は、学校によって偏りがあり、若手研修の持ち方の工夫が必要である。

○提言Ⅱについて

・小規模校だからこそ実現できた内容であるが、それぞれの学校が自校の特色を見出し、その特色を生かした学校経営をしていくことが大切である。

⑶　グループ〔う〕

○提言Ⅰについて

・４関与の分類により実務が整理されている。
・日常、メンターとメンティーが組みながら校務を行っている様子がうかがえる。
・校長の意向を踏まえて、足りない部分は教頭が補充している。

○提言Ⅱについて

・児童生徒の交流は以前から行われていた。職員研修を教科ごとに行ったり、学校評価項目をそろえたりしている。小学校は連携、中学校は一貫という意識のずれを補正したい。

⑷　グループ〔え〕

・ミドルリーダーを育てていく時間の確保は難しいが、グループを作り、その中で指導力向上を図っていくのはよい。教員一人一人が課題をもち、異なる経験をもち合ってその課題を解決していく姿勢が大切である。若手育成の方法としては、主と副の２人体制で校務分掌を受けもつことも効果があると考えられる。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・研究の手順が、アンケートの実施→課題の洗い出し→テーマの作成→実践という問題解決のプロセスをきちんと踏んでいた。
・３つの視点から課題を明らかにしていた。教職員の指導力の向上は個人の力を高めること、協働性の向上は個人の力を全体に生かすこと、意欲の向上はモチベーションの維持向上のことであり、分かりやすくベーシックで広めやすい視点であると感じた。
・マネージャー・チーフ制は、とてもおもしろい取組である。トップダウンでやらないとうまくいかない面もあるが、意識改革という意味で素晴らしい研究である。

⑵　提言Ⅱについて

・異校種連携について、特色ある環境を生かすという視点で取り組んでいるのは、素晴らしい。まさに「ピンチはチャンス」という考えを実践している。
・特別支援学校との交流は、今後ますます重要視されるインクルーシブ教育を実践したものであり、最先端の取組である。思いやりを育む貴重な事例である。
・小中ＰＴＡの連携は、合同行事を実施するうえで大変便利がよさそうであるが、多忙さが浮かび上がり心配である。
・小中併設校の連携は、乗り入れ授業により、小学校で教科担任制となるのは理想的である。

⑶　まとめ

○教職員のベクトル

・多少のズレや違いを容認する寛容さが必要
・方向性決定には全員の意見集約が重要
・法律や国県市町の方針などを整理
・校長との事前協議で校長の意向を反映

○事前の見直しや立ち上げ、職員支援の考え方

・実態把握→アセスメント→目標設定→手だての検討と実行というプロセスが大切

（記録：新井　和子・堀越　眞人）

第５Ａ・Ｂ分科会　教職員の専門性に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　宇都宮市立姿川中学校長　　小池　正巳　先生

教職員の資質・能力の向上を図る教頭の在り方
－協働する教職員組織を目指して－

提言地区　塩谷地区　教頭会

教職員の授業力向上を図るための教頭の役割

提言地区　芳賀地区　小中学校教頭会

１　提言趣旨

⑴　塩谷地区教頭会

ア　主題設定の趣旨

近年の教員の大量退職、大量採用の影響等により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始めかつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり、継続的な研修を充実させていくための環境整備を図り教職員の資質・能力の向上を図る必要がある。

イ　研究の概要

⑴　行動規準表を活用した資質・能力の向上の事例「ミドルリーダーの育成」

⑵　研修での資質・能力の向上の事例「研修会への参加促進」

⑶　協働する組織を編成することによる資質・能力の向上の事例「初任者の学級経営サポート」

ウ　成果と今後の課題

⑴　成　果

①　８月現在、アドバイスや資料をもらったという教員が３名おり、指導力向上につながった。

②　行動規準表の目標どおり、研修会の参加割合が増えた。

③　初任者の指導力向上とともに、指導者側の資質・能力も向上した。

⑵　課　題

教職員全体の資質・能力の向上には至っていない。今後は、初任者、ミドルリーダーだけではなく、教職員すべてに研修の機会等を増やしていきたい。

⑵　芳賀地区小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

中学校において依然として残る教科等の枠を超えた研修体制の在り方の難しさ、長時間の部活動指導等による多忙感等の課題に対し構築されつつある校内研修の形を更によりよくして授業力向上や組織力向上を目指し、研修の一層の充実を図るために教頭としてどのように関わったらよいかを考察するために、本主題を設定した。

イ　研究の概要

⑴　教頭対象アンケートによる実態把握

芳賀地区中学校15校における授業力向上に関する取組をアンケート調査した。

本地区は小中学校合同の教頭会研究組織であるため、義務教育９年間の学びの連続性を考慮し、小学校32校でも同様の調査を実施し、参考とした。

⑵　教職員の指導力向上に関する実践事例調査

小中学校それぞれの校種ですでに実施している実践例を調査し、芳賀地区内で共有していく素材とした。

ウ　成果と今後の課題

本研究は、３か年研究の初年度であるため、実態調査で終始してしまったが、各小中学校が抱えている様々な課題が明確になった。

その課題をふまえて、次年度の「関与表」作成に向けての具体策を検討していきたい。この「関与表」は、教頭として、先輩から後輩への管理職ノウハウの伝承という重要なものであるので、実効性のあるものを作成していく必要がある。

２　グループ協議内容

⑴　〔あ〕班

○行動規準表の活用

・学校経営方針、学校評価、全国学力・学習状況調査、とちぎっ子学習状況調査等のデータに基づいた客観的な目標設定、評価ができるよう管理職が指導することが重要。

○若手教員の育成

・自ら他の教員に教えを請う教員が少ないので、教頭として積極的に指導するべき。

⑵　〔い〕班

○行動規準表について

・補助簿を作成して、記録をとると期末面談のときにたいへん参考になる。

○教頭としての役割

・校長の学校経営方針の具現化、教職員の連絡調整、外部機関との連携等、教頭の果たす役割は大きいが、チームの要として目標をもって取り組んでいきたい。

⑶　〔か〕班

○行動規準表について

・中間面談は、資質能力向上のためには大変重要である。

・キャリアⅢの教員に対しては、学校経営参画を意識した目標を設定している。

○実態調査から明らかになった課題への関与表の作成

・次年度以降の「関与表」の作成に大変興味があり、楽しみにしている。

⑷　〔く〕班

○初任者指導について

・特に、講師への指導時間の確保が難しい。教頭や教務主任を中心に行っていきたい。

○「関与表」について

・教頭として、先輩のノウハウの継承という意味で非常に有効。完成したらぜひ、他地区へも伝えてほしい。

⑸　〔こ〕班

○初任者指導へのサポート三人体制について

・人材的に大変恵まれている。他地区ではなかなか難しい現状にある。非常勤講師や管理職等が積極的に関わり、これからの人材を育てていきたい。

○「関与表」について

・大変興味があるので、完成したらぜひ伝えてほしい。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

○行動規準表を活用したミドルリーダーの育成

当初面談において、各教員の目標設定をきちんとさせた上で、教頭職がその実現のために温かい励ましや助言をしながら資質能力を向上させることは、今後ますます重要になる。

○校内研修による教職員の資質能力の向上

校長の判断にもよるが、積極的に研究指定を受け、学校の課題を克服していくことで資質能力向上につながることもある。また、グループを立ち上げて研究を進めさせたり教育論文を執筆させたりすることも資質向上につながるであろう。

○チームでのサポート

初任者の学級経営に対するサポートはたいへん重要であり、学校を挙げて今後も取り組んでいってもらいたい。

⑵　提言Ⅱについて

○研修時間を確保するための効果的な取組

管理職として、研修時間進行管理をすることが重要。部活動等の時間を調整しながら、隙間時間をうまく活用して積極的に進めていってほしい。

○教職員の自主性による授業力向上に向けた取組

指導主事等を招聘して授業研究会を何度も行うことは難しいので、少人数グループである特定のテーマを決め、それを達成するために資料や文献を読んで意見交換をする研究があったが、時間がないのでお互いにメールで意見交換したという事例もあった。

○小中連携による授業力向上

お互いの時間を調整しながら連携していくことはとても難しいことであるが、小学校における外国語の教科化などを課題として、中学校の英語科の先生が小学校の先生と協議するなどの共通課題を設定し、研究することから始めるのもよいのではないか。

（記録：杉山　敏明・福田　一悦）

第６Ａ・Ｂ分科会　副校長・教頭の職務に関する課題（小学校・中学校）

助 言 者　佐野市立犬伏小学校長　　大島　秀雄　先生

人材育成を図り、学校組織を活性化するための教頭の役割

－教頭会調査結果から見えてきた課題への取組－

提言地区　宇都宮・上三川地区　小学校副校長会

社会とともに力強く生き抜く子どもの育成を目指して

－専門性に基づく「チーム学校」体制の構築における副校長・教頭の役割－

提言地区　宇河地区　中学校副校長・教頭会

１　提言趣旨

⑴　宇都宮・上三川地区
小学校副校長会

ア　主題設定の趣旨

副校長・教頭の職務に魅力とやりがいを感じて職務に当たるためには、「人材育成を図り一人一人の資質能力を高めること」や、「組織を活性化させて協働の意識を高め職場の人間関係づくりを進めること」に、一層の工夫を加え前向きに取り組むことが大切ではないかと考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

⑴　アンケート結果からの考察
⑵　教職員の評価・育成
　ア　当初面談までの事前準備
　　①　事前打合せ
　　②　授業参観
　イ　当初面談の実際
⑶　機動力のある組織と協働のあり方
　ア　学校の特性を生かした組織作り
　イ　「適応部会」の効果

ウ　成果と今後の課題

・県教頭会の調査結果から見えてきた課題について、各学校がもっている人材を活用し、場・方法を工夫することによって解決の方向性を見つけることができた。
・今回の実践例は、どこの学校でもできるとは限らない。各学校の実態に応じ工夫、改善し実践として蓄積することが重要である。各校の副校長・教頭が情報を交換し合い、連携し、課題解決への取組を継続することが大切と考える。

⑵　宇河地区
中学校副校長・教頭会

ア　主題設定の趣旨

学校が複雑化・多様化した課題を解決し、子どもたちに「生きる力」として必要な資質・能力を育むためには、「チーム学校」の実現が必要である。そこで、その重要な担い手である管理職、特に教頭に焦点を当て、研究主題を「専門性に基づく「チーム学校」体制の構築における副校長・教頭の役割」とした。

イ　研究の概要

⑴　アンケート調査による「チーム学校」としての現状分析
⑵「チーム学校」として取り組んでいる実践事例の紹介
　ア　地域協議会の運営
　イ　教委・センターなど関係機関との連携
　ウ　授業などへの講師活用
⑶　機能させるためのポイントと課題点の整理

ウ　成果と今後の課題

・チーム学校を機能させるためのポイントとしては、目標やグランドデザインを共有することの大切さや、目標達成に見合った人材を確保すること、業務内容を明確にすることで、連携や分担がうまく確立できることなどが分かった。
・組織的で継続的な体制づくりや目標実現のための人材発掘の難しさ、多様な人材とつながるための教員一人一人の資質・能力の向上という課題もうかがえる。

２　グループ協議内容

⑴　協議の柱について

「人材育成を図り、学校組織を活性化するための教頭の役割」

〈教職員評価・育成〉

・教職員と行動規準表の目標設定をする前に校長・教頭が事前に打ち合わせを行ったり、授業参観したりすることは、目標設定への妥当性が増し教職員のやりがいにつながるので有効だと思う。
・大規模校では、校長と打ち合わせをしておく時間を確保することが難しい。
・週案に行動規準目標についての取り組みを記入してもらい取り組み状況を確認している学校もある。

〈機動力のある組織と協働の在り方〉

・提案にあったような人材を生かした部会（適応部会）を校務分掌に加えていくことは、機動力・協働の意識も高まるのでいいことだと思う。
・学校規模や学校の特性に合わせて組織を編成していくことが大切だ。
・校務分掌では、１学期のチーフ・２学期のチーフと学期ごとに主務者を代えることで人材育成を図っている。

⑵　協議の柱について

「これからの教育活動を充実させる「チーム学校」を機能させるために、教頭はどのように取り組んだらいいのか」

・教頭として、それぞれの立場の方々に声を掛け情報を得ることや、目標を共有する取組を行うことが大切。
・地域とのパイプを太くしていくことができる地域連携教員を育てるために意図的に担当時数を削る等の対策をとることも考えられる。
・地域協議会では、教頭と地域コーディネーターとの仕事の分担や組織に学校間の差がある。チーム学校を実現するためには、改善が必要な部分もある。
・小規模校では、校務分掌を一人で複数担当しているため教頭が地域連携教員担当の仕事をカバーしている。
・「チーム学校」実現のために、外部人材の活用が考えられるが、活用の頻度が高くなれば、担当する教職員の負担も増すというジレンマがある。

３　指導助言

⑴　提言Ⅰについて

・教頭会の調査結果から、実態に基づく方向付けがなされた。
・アンケートの結果から、「労力を費やしたい職務」「労力を費やしている職務」の間に多少のギャップを感じながら、「教職員や児童生徒の成長が見られたとき」「保護者・地域からの感謝や評価が得られたとき」に教職員はやり甲斐を感じていることは教師の原点と言える。
・教職員評価については、事前の打ち合わせ、授業参観を通して配慮児童の様子等を一緒に観察したりしながら教職員と一緒に管理職が向上を目指した教職員評価をしている点は大変参考になる。
・Ｃ校の事例について、組織の核として「適応部会」を立ち上げて活性化が図られている。教頭・副校長のコーディネートによって問題は組織で解決するという意識をもっていくことで一枚岩の組織集団になることができる。

⑵　提言Ⅱについて

・チーム学校を、専門スタッフを活用しながら地域と協働して子どもを育てる仕組みの構築と捉えると、教頭は調整役ではあるけれども、あまりにも多くの業務を担い過ぎている現状がある。教頭が実務まで担っているのではチーム学校の実現が難しくなる。
・地域連携教員と地域コーディネーターの役割が分担されている実践校の例は素晴らしい。地域連携教員への指導助言をするような体制をとることができれば、より外部人材の活用が図られるようになるであろう。
・関係機関（市教委等）を組織的に統括して対応できるような方法が広まれば、今後、更なる解決策が講じられるのではないか。
・地域に根差した組織体制の構築が必要であるが、学校がどこまで求め、できるのかを精査し、持続可能な体制作りを目指すべきである。それには校長・教頭の助言支援が必要である。

（記録：石井　和子・髙久由紀子）

地域とともにある学校づくり

上三川町立本郷中学校　瀧　澤　弘　子

本校では平成19年度から地域の方のご指導やご協力のもと、有志による「ホタル会」を結成し、ホタルの幼虫を飼育する活動に取り組んでおり、今年で10年目を迎えます。

毎年、７月から３月まで卵から育てた幼虫を飼育するとともに、餌となるカワニナも育て、３月末に近くの磯川緑地公園内のヒゲ沼に幼虫を放虫します。５月末には上三川町内の有志でつくる「ほたるの会」主催の「ほたるまつり」において、幼虫の飼育の苦労や感想等を、来場者の前で「ホタル会」の生徒一人一人が発表しています。今年は５月28日㈰に行われ、発表会後、夕闇の中を飛ぶ美しいホタルを皆で鑑賞しました。夏休み中も毎日交代で生徒が水温の管理や水槽の清掃、餌やりを行うなど、大切に飼育しています。今後もホタルの舞う故郷を継承するために活動を続けていきます。

また、本校ではボランティア活動にも積極的に取り組んでいます。上三川町が主催する町民スポーツ・レクリェーション祭やしらさぎマラソン大会等で、生徒が運営側の補助員として活動し、町民の方と一緒に町の行事を盛り上げています。さらに、今年初めて参加した「ＲＵＮ伴とちぎ2017」では、参加者の皆さんとともにたすきを繋ぐお手伝いをしました。ボランティア活動に参加する生徒は、年々増えています。

このような活動を通して、本校では、地域から学ぶ学習を推進するとともに、地域に貢献し、地域とともにある学校づくりを進めていきたいと思います。

義務教育学校としての小中一貫教育への挑戦

那須塩原市立塩原小中学校　山　本　幸　子

本校は、平成26年度に施設一体型の小中一貫校として開校し、今年度新たに、義務教育学校として歩み始めました。１年生から６年生までを前期課程、７年生から９年生までを後期課程とし、４・３・２のブロック体制（Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期）をとっています。

教育活動では、地域に根ざした生活科・総合的な学習の時間の実践と９年間を見通したカリキュラムによる英語教育、そして、系統的な作文指導を柱として、数多くの特色ある取組を行っています。

【Global Communication Day】

「地域学習」では地域の教育資源を活用し、塩原の自然・歴史・観光・文化について学び、「塩原ジュニアマイスター」を目指します。全校生で取り組む「箒川リフレッシュ大作戦」は、漁業組合や観光協会等、地域全体を巻き込んでの大きな活動になっています。

「英語教育」は「那須塩原市小中一貫英語教育カリキュラム」を用いて、コミュニケーション活動を重視した教育を実践しています。授業は全時間、ＡＬＴと担任や英語科教員によるＴ・Ｔです。夏休みのEnglish Summer Campでは多くのＡＬＴと一緒に英語劇を創ります。

【箒川リフレッシュ大作戦】

「作文指導」では、毎月１回「作文の日」を設けて全校生で意見文などを書き、新聞へ投稿しています。行事や日々の生活を通して感じたり考えたりしたことを書いた作文が、今まで数多く新聞に掲載されました。

それ以外にも、全校生で取り組む体育祭や文化祭など、楽しい行事も目白押しです。様々な体験活動を通して多くの人々に出会い、本校の子どもたちは「自分を磨き　人に優しい児童生徒」にすくすくと成長しています。

地域との連携を工夫した学校教育を目指して

下都賀地区小・中・義務教育学校教頭会会長　橋　本　宣　昭

下都賀地区の小・中・義務教育学校数は小山市35校、栃木市44校、下野市16校、壬生町10校、野木町７校の計112校、教頭先生は114名です。今年から小山市立絹義務教育学校が誕生しました。関連して学校運営協議会の組織づくりについて、各市町の特性を生かしながら準備が進んでいます。

本地区は、文化・芸術的活動が盛んで多くの活動が伝承されてきました。学校教育と連携して取り組んでいるものもたくさんあります。体育の授業と共に社会体育や部活動も熱心な地域で、「健やかな体」の育成に役立ってきました。

煉瓦窯での中学生ボランティア活動

しかし、近年の急激な少子化に伴い地域の文化芸術活動も社会体育・部活動も、共に参加者が減少している状況にあり、両立が困難になってきています。このため、「社会に開かれた教育課程」の編成を工夫することで、学校と社会が連携・協働しながら新しい時代に求められる資質・能力を育むことが課題になってきています。

今年度の研究は、地区内を６部会に編成して、小学校は「子どもの発達」、中学校は「教育課程」に関する課題を設け取り組んでいます。今年は初年度であるため、研究主題に基づき３回の研究会を行い、まとめてまいりました。今後は、この成果と子どもたちの実態を踏まえ、さらに地域のニーズに応えられるように連携して教育活動を展開していく予定です。

教職員の資質・能力の向上を目指す『チーム教頭会』

塩谷地区小中学校教頭会副会長　見　目　治　美

塩谷地区教頭会は、矢板市、さくら市、塩谷町、高根沢町の小学校25名、中学校11名（県立１名を含む）の計36名で組織されています。全体研修会を年２回、運営委員会を年３回、さらに、研修部と調査・要請部の２つの専門部を置いて活動しています。

今年度は全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」の１年次にあたり、本地区は、「教職員の専門性に関する課題」について、「教職員の資質・能力の向上を図る教頭の在り方～協働する教職員組織を目指して～」と研究主題を設定し、３つの視点「行動規準表を活用した資質・能力の向上」「研修での資質・能力の向上」「協働する組織を編成したことによる資質・能力の向上」から、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組むための教頭のかかわりを中心に研究を進めています。

10月の全体研修会では、高根沢町が研究発表を行い、指導講評をいただき、今後の研究の方向性を見極めることができました。また、前栃木県教育長の古澤利通氏をお招きし、「これからの教育と教頭に期待されること」と題して講演会を実施しました。社会の進展や雇用の動向から、未来を創る人材像を示唆してくださり、教育を通して何ができるかを考えさせられました。

11月の県の研究大会では、第５Ａ分科会で本地区の研究を発表する予定です。さらに、来年度の関ブロ大会での研究発表に向けて、実りある研究となるよう「チーム教頭会」として、会員一丸となって教頭のかかわり方について研究を深め、教職員の資質・能力の向上を図れるよう努めて参りたいと考えています。

ひ　ろ　ば

私は不審者？

宇都宮市立瑞穂野北小学校　神　野　安　伸

旅先では何でも見たい性格である。観光客が行かないような場所に行くうえ、ダサい風体なので、怪しいオジサンである。

山間のある集落で、道端に五輪塔があった。つい車を止めてしまう。よく見ると石塔がいくつかある。形を見比べ銘文を読んでいるうちに、思わず長居になった。気付くと近くに止まった軽トラックの中から、地元住民らしい人が訝し気にこちらを見ている。笑顔を作って会釈したが反応はない。慌てて立ち去るとかえって怪しいので、石塔を見終わってから、もう一度会釈して（やはり反応はなかったが）車に乗った。

鉄道の廃線跡を辿ることもある。余所者はめったに来ない山林や住宅地の中を歩いていくのだが、あるとき雑木林を抜けたらパトカーが待っていたことがあった。警察官に住所氏名と来訪目的を聞かれ、デジカメの画像を見せて解放された。つまりは職質である。

こんなことは枚挙に遑がない。日頃は、職業柄自分が不審者情報に目を配ったり、職員に「誤解を招く行動はしないように」と偉そうなことを言ったりしているが、自ら瓜田に履を納れているようなものだ。しかし、マイナーなことに興味がある者には、窮屈な世の中になったなあ…。

何が幸せかやってみないとわからない

那珂川町立馬頭東小学校　大　金　正　道

これは、ここ数年私がいつも心にとめておいて、自分の励ましやいましめにしている言葉（座右の銘）です。

年をとるにつれて、肉体的にも精神的にも「自分にできるわけがない」「自分には関係のないこと」などと、やる前からあきらめたり、無関心でいたりすることが多くなってきました。もの足りなさや寂しさを感じながらも、新しいことを始めるのはめんどうだと思っていました。そんなときにこの言葉を職場の上司から教えていただき、「とりあえずやってみよう」と、少しずつ前向きに考えられるようになってきました。

今年の３月に町の青少年海外体験学習の引率として、アメリカの姉妹都市を訪問する機会を得ました。はじめは未知なることへの不安から、年度末の多忙な時期に…や、どうして自分なのか…と、否定的なことばかりが頭をよぎっていましたが、その都度この言葉を思い出して自分を奮い立たせました。結果、ホスピタリティ溢れる姉妹都市交流を体験することができ、ブロードウェイや自由の女神など、自分には一生縁がないと思っていた場所で、初めて味わう喜びや感動を体験することができました。

あとどれくらい心が躍るような新しい体験に出会えるか分かりませんが、臆病な自分を鼓舞する拠り所として、これからも大切にしていきたい言葉です。

働き方改革には意識改革を

佐野市立氷室小学校　飯　塚　雅　美

「残業ゼロで超優良企業に」という本を最近読みました。ある広告関係の会社が、残業100時間を超える超ブラック企業から５年の歳月をかけて残業ゼロにしたという話です。不思議なことに、残業ゼロにしたら、会社の業績は大きく伸びて過去最高を記録したそうです。いま新聞では、一流企業での過労死や、教員の長時間勤務が話題になり、安倍内閣はその対策に大きく動き出しました。働き方改革は、いまや日本全体で取り組まなければならない課題となってきたのです。

では、何をすればいいのか。まずは、私たち一人一人の意識改革をすることが必要かと思います。私たちの理想は、残業ゼロを目標とし、空いた時間は、家族のために、自己啓発のために、またはリフレッシュの時間として使うというライフスタイルです。現場からは不可能だよという声が聞こえてきそうですが…。意識改革とは、この理想を実現しようとする強い意志をもち続けることです。全員が同じ意識をもてば、たとえ無理だと思ったことも変わっていくかもしれません。様々なアイディアも出てくるはずです。

教員の働き方改革は一筋縄ではいかないと思います。でも、社会全体で取り組もうとしている今こそ、志をひとつにして努力すべきです。

編集後記

ある先生の机に『成果を上げて５時に帰る教師の仕事術』なる本がありました。仕事の質を落とさずに効率を上げようと、この先生なりに試行錯誤しているようです。教頭としても校務の改善を図り、何とか「働き方改革を！」と思うのですが、なかなか成果が出せずにいます。

さて、第46号は、関ブロ栃木大会に向けた準備の進捗状況と、第55回研究大会の報告を中心に編集いたしました。少しでも会員の皆様の参考になれば幸いです。

末筆ながら、お忙しい中原稿をお寄せいただいた皆様に、深く感謝申し上げます。

（村岡）